インド留学記

その7

シク教の祈り

東方研究会
研究嘱託
保坂俊司

前回御紹介いたしました様に、シク教においては「祈る」ということには幾つかの特別な意味があります。勿論、どの宗教においても「祈り」は重要な宗教行為ですから重視されていることは申すまでもないことです。このことは「祈り」に対して宗教学辞典で「神と人間との内的交通・神との生ける人格的接触をもつこと、あるいは対話をもつことである」と定義していることからも御解りでしょう。キリスト教でも「祈りは信仰の最も優れた実行である」として祈りを重視しています。

確かに「祈り」が重要なのは解るのですが、一体どうして重要なのかということになるとどうもはっきりとしません。その理由の一つに「祈り」が持つ意味の多用性といいますか多義性があるとおもいます。特に、「祈り」には祈る主体者である人間の心の問題も見逃すことが出来ないために、その意味が複雑になってしまうようです。しかし、今回は余り難しいことは抜きにして、基本的なことを検討します。

シク教の場合「祈り」を考える時先ず考えなければならないのが、祈る相手と祈る主体者です。つまり、何に向かって誰が、何の目的で祈るのかということです。当たり前のことなのですが是れが大きな問題です。というのも、シク教では全く異なった2つの宗教とは深く拘っていて、その世界観を融合して祈りの世界を造り上げているからです。この2つの宗教がヒンドゥー教とイスラーム教のことです。

この二つの宗教はどこを執っても全く水と油の関係です。殆ど重なる部分が無いくらい違っています。それは世界観の違いにもはっきり現れています。つまり、ヒンドゥー教は神様が沢山いて、それぞれの機能別に分業しているのですが、イスラーム教の場合は一人で全てやってしまうのです。いわば官庁組織のヒンドゥー教とワンマン経営者のイスラーム教といった所でしょうか。こうなりますと、人間も当然位置付けが変わってきます。つまり、ヒンドゥー教の様に神様が沢山いると、人間のほうから神様を選ぶことができる余地が大きくなるのです。それに対してイスラーム教では、そんなことは絶対に不可能です。神は唯一絶対で人間は塵同然の存在です。

こう云ってもなかなか理解出来ないでしょうから一つ例をあげてみます。ヒンドゥー教では呪文が非常に大切です。真言密教などでも良く真言が重視されますが、あの意味不明の言葉のことです。ヒンドゥー教では、神の力がイスラーム教のように強くありませんから、神様も人間の云うことを聞かなければなりません。その命令書の役目を呪文が果たすのです。ですから、神様も呪文を懸けられることを恐れて、にげまどうなどということになります。従って、神と人間の関係はかなり近くて、時には入れ替わることも可能なほどなのです。しかし、イスラー

ム教の場合は違います。イスラーム教では、神は唯一絶対、全智全能なんでもござれの神様です。ですから、人間の側から神に働き懸けて何か神にしてもらおうなどということは、思いもよりません。人間はただ神の力の前にひれふすばかりです。

以上のような、世界観の違いが、実は「祈り」の形態にも深く影響してきます。というのは、簡単に云いますと「自力の祈り」か「感謝の祈りあるいは他力の祈り」かの差が出てくるからです。日本でも「自力」と「他力」は良く議論されますが、ヒンドゥー教とイスラーム教のそれは、全く日本の比ではないのです。その原因がこの神の性質から導き出されてくるわけです。

難しいことは、後回しにして私の感想を先ず紹介いたします。インドに参りまして、様々な宗教の人々の祈る姿を見ておりますと、その差というものが祈りの場つまり寺やモスクに現れているように思われます。ヒンドゥー教の寺院は「祈り」の場としては、賑やかで、艶やかで、そして祈りの声もどちらかというと騒々しい程です。まさに生きることへのエネルギーの発散の場といっても良いほどに、人間の意志が溢れています。それは神の意向でそうなったというのではなく、人間のギラギラした欲望が剝き出しになっているといった感じです。神はそこでは丁度陳情を聞く役人のようなものです。時には、今流行の袖の下に目が眩んで…、ということもおこりそうなのです。いずれにしろ、ヒンドゥー教にとって、寺は神を遇す場として無くてはならない、だからこそ、寺は美しく飾らなければならないのです。そして「祈り」も神に気にいられるように努力せねばなりません。いわば自力の祈りを求められるのです。

ところが、イスラーム教の礼拝所であるモス

クはどうでしょうか。確かにたてものこそ立派ですが、その割には中は全く空同然の簡素さです。極端な言い方をすれば別に建物はいらないのです。ジュウタン一枚もって歩けばいたる所モスクになるのです。神への祈りの場はどこでもよく、またどんなに簡素でも本質的に神との関係は変わらないからです。なぜなら神は人間の思惑など全く超越してしまっているからです。当然「祈り」も神に感謝する、あるいは神を畏怖する心の現れとして、静かでつつましやかなものになってきます。さて、この両極端の「祈り」をシク教は、如何結びつけたでしょうか、次回に検討しましょう。